

第7章 . 保守・その他

7-1. 故障・トラブル等の原因と対処

本機は【DOS/V系パソコン】+【拡張ボックス】のシステム構成で全数検査のうえ出荷されています。お手元での動作確認方法は1 - 6項に記されています。動作に不具合があるときは以下の諸点を再点検してください。それでも不明なときは巻末の【Q & Aフォーム】にシステム構成（特に外部機器の接続回路）等の動作条件を御記入のうえ、技術部宛FAXしてください。

迅速に応答する体制となっています。なおTELいただく場合も、客観情報の整理・評価は問題解決のスピードアップにつながりますから、事前に【Q & Aフォーム】をFAXしてください。

再点検・確認ポイント

- | | |
|---------------------|---|
| (1) I/Oアドレス | IBMPC/AT互換機の規定範囲か？(1 - 3項)
他のボードと重複していないか？ |
| (2) DMA、
割り込みレベル | 他のボードと重複していないか？(3 - 6項) |
| (3) トリガ関連 | トリガ待ち状態ではプログラムが止まってみえる。(3 - 11項) |
| (4) アナログ入力 | ±35v（本ボードのアナログ入力保護耐圧）以上の過大入力
が印加されると故障の原因となります。(2 - 1項) |
| (5) デジタル入出力 | 本ボードのTTL入力（外部割り込み、および汎用8ビット）に
接続できる信号源はTTL（LS、CMOS等の5v電源動作素子）
に限ります。現場で不適切な信号源を接続したために本ボード内
のTTL入力素子を破損する事故が頻発していますので御注意くだ
さい。（次ページ/図7 - 1参照） |

動作確認方法

当社では原則として、ユーザ作成のソフトウェアについては評価しません。動作確認は本製品添付の当社製プログラム（1 - 6項）の実行結果について推測・適否・判定を行います。QAリクエスト時には当プログラムの実行結果をレポートしてください。

ボード内TTL入力素子破損の主な原因

TTL入力素子の絶対最大定格は【負側：-0.6V】【正側：+7V】です。このレベルを一瞬でも超えると入力素子破壊の原因になります。主な危険要素は、

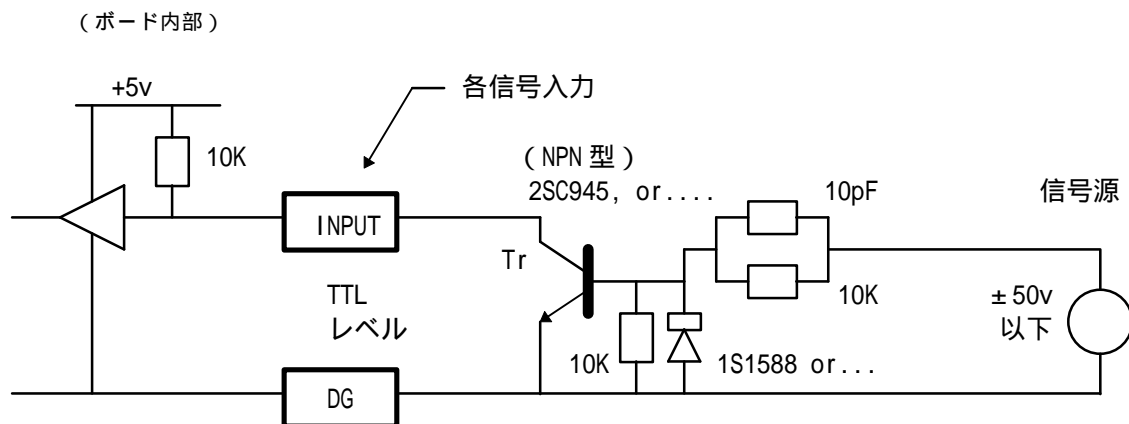
ファンクション・ジェネレータ等の交流信号出力を接続して破損させる例が多いようです。矩形波でも±に振れる信号は接続できません。特に、負側の許容レベル【-0.6V】が低いことに注意してください。

+5V以上に振れるロジック信号も接続できません。12V～24V電源を使用する機器からのデジタル信号は不可、信号レベルが不明なときは信号源の電源電圧が目安になります。

アナログ信号源は±15V電源によるオペアンプ出力が多く危険です。なお、TTL入力にアナログ信号を接続しても立上り/立下り特性等が仕様を満足せず、正常な動作は期待できないでしょう。

信号源と本ボードのグランド・レベルに差があるときも危険です。（テストで測定可能）

図7-1. 【高レベル信号】 【TTLレベル】変換回路例



《注》本回路はインバータ（極性反転）です。

7-2. 修理のときは

入手経路の如何にかかわらず当社宛に直接お申しつけください。 商社等を経由されますと時間がかかるだけでなく、情報交換の不便、費用の面でも不利になります。 なお当社では修理依頼を受けた製品が検査の結果、良品と判定された場合は（保証期間内でも）手数料を申し受けます。

特に最初からの不具合には誤解や情報不足によることが多いので、事前に御相談ください。

【Q & A フォーム】が便利です。

無償修理

納入後 1 年以内の自然故障、および当社製造上の問題に起因した故障に対しては無償修理を行います。 但し、故障・不具合の原因や無償修理の対象となるか否かは（過去の経験等に照らして）当社側で判定させていただきます。

なお当社では保証書を発行していませんが、社内では製造番号と出荷年月日の記録を基に判定しています。

有償修理

落雷等の自然現象、漏電・過電圧印加・機械的破損・その他、ユーザ側の責に帰する故障品、または納入後 1 年間を経過した製品の自然故障に対しては実費・有償にて修理をお願いします。 性格上、事前見積もりは不可能ですが、制限額を事前通知いただければ、作業過程で制限を超えそうな見通しがたった時点で連絡・相談させていただきます。

受け渡し : 宅配便によるセンドバックで行います。

修理期間 : 全んどの場合、当社内で 24 時間以内に完了・返送しています。時間を要する場合は御連絡いたします。

費用の目安 : 修理費用は事務管理手数料、技術者の所要時間（1 時間単位）手数料、および交換部品代の合計です。 2000 年 1 月現在（時勢により変動します）では、

事務管理手数料（1 件当り、返送運賃含）：＝ ¥ 4,000

修理時間手数料：＝（時間単価 ¥ 6,000）× 所要時間

交換部品代 : ＝ ¥ 実費

故障経緯、システム客観情報の添付は時間の節約・コストダウンに有効です。典型的な事例では費用合計が ¥ 20,000 を超えることは希れです。

【注 2】 当社製品に対してユーザが改造を行った場合は、当社サポートの対象外になります。 改造とは製品に新たな部品を追加実装、または実装部品を削除したり、回路パターン・接続に変更を加えることです。 なお、当社がオプションとして供給、または指定した部品の追加実装・交換はこの限りではありません。

7-3. アナログ入力範囲の再調整

動作テスト・確認の方法は【1 - 6 項】のとおりです。同テストから得られた値に入力範囲の変化やオフセットが認められるときは再調整が必要です。アナログ回路は経年・環境変化に対する保守を定期的に行うことが望ましく、使用環境・周囲温度に変化差がある場合は季節単位、通年安定した使用環境の場合は1～2年に1度は校正することが理想的です。

再調整の方法・手順を以下に記しますが、極細のドライバ、基準電圧源を必要とし、手順もやや複雑ですから御希望により当社でも（実費で）お請けします。

= = 準備 = =

本ボード上の諸設定は出荷時の状態（1 - 2 項，1 - 3 項）とします。

パソコン本体または拡張 I / O ボックスの電源を切った状態でカバーを外し、任意の拡張（ISAバス用）I / O スロットに本ボードを無理なく押し入れ装着します。このとき、

パソコン本体または拡張 I / O ボックスの電源を必ず切っておく。電源を入れたままで本ボードを抜き差しすることは双方の故障原因となります。

本ボードのカードエッジ（金メッキ端子）に手を触れないこと。手を触れると、（油脂成分の付着等により）接触不良の原因となることがあります。もし、触れてしまった場合はアルコール等で拭き清めてください。

イクステンダ等により本ボードを I / O スロットから引き出した状態では誤動作を起こすこともありますから、必要以外は使用しないでください。

同時に使用する他の I / O ボードがあり、これに設定されている I / O アドレスが本ボードの（出荷時）設定と重なる場合は、本ボードの I / O ベースアドレスをシステムの許す範囲で変更・設定してください。その場合は、試運転プログラムの冒頭で本ボードの I / O ベースアドレスを初期値から変更した値に設定する必要があります。【1 - 3 項 参照】

図1 - 6のように、本ボード全チャンネルのアナログ入力を基準電圧源に接続します。デジタル入出力の接続は不要です。

以上で準備完了です。電源投入順序は全機器同時、または外部機器を先にパソコン本体を最後に行います。電源切断は逆順序です。

電源を投入、MS - DOS システムを立上げます。再調整に使用するプログラムは試運転でも使用した“65 QB2”です。> 65 QB2【ENTER】でプログラムが走り始めます。

外部基準電圧源を操作し、本ADボード設定入力範囲の下限付近でオフセット調整を、上限付近でゲイン調整を、目標値を得よう交互に2～3回繰り返して最適位置を求めます。

調整はユーザシステムに都合のよい入力範囲で実施してください。なお、本機の標準出荷時はAモード±10V入力範囲で最適調整されています。

ADM-652AT の再調整

調整はアナログ入力範囲の《最大値付近》と《0V》の2点間で行います。本機のアナログ回路/A/D変換器は $\pm 0.025\%FS$ ($\pm 1LSB$) 以内の非直線性を持っており、2点間調整だけで設定入力範囲の全域に渡って $\pm 0.075\%FS$ の精度 (=相対正確度) を実現する能力を持っています。また高精度部品の使用により、調整を実施した入力範囲以外に設定を変更してもレンジ間誤差は $\pm 1LSB$ 以内、すなわち相対正確度は $\pm 0.095\%FS$ 以内です。

この相対正確度 (= 校正可能限度) に校正に使用した測定器の正確度を積算した値が絶対正確度です。当社の製造・調整は $0.03\%FS$ の基準電圧発生器を使用して常温で行っています。

したがって現時点での絶対正確度は、

最終調整 $\pm 10V$ 範囲/Aモードで $0.105\%FS$ 、
その他の入力範囲で $0.125\%FS$ です。

なお経年変化のデータ/保証は無く、システム内部雑音・温度ドリフトにも御注意ください。

= 調整手順 =

オフセット調整 : 入力電圧が0Vのとき、A/D変換値(表示)が800Hと
(バイポーラ入力範囲のとき) なるようTM1を調整します。

オフセット調整 : 入力電圧が0Vのとき、A/D変換値(表示)が000Hと
(ユニポーラ入力範囲のとき) なるようTM2を調整します。

ゲイン調整 : 入力電圧が最大値付近のとき、A/D変換値(表示)が整合
した値となるようにTM3を調整します。

[オフセット調整 ゲイン調整] を2~3回繰り返して所定の精度に追い込みます。

【注】電源ONから調整実施までに1分以上のウォームアップ時間をとって下さい。

表7-3A. 標準Aモードの調整対象・目標【12ビット機: ADM-652AT】

設定入力範囲		$\pm 10V$	$\pm 5V$	$\pm 2.5V$	$0 \sim +5V$	$0 \sim +10V$
オフセット調整	基準入力	0V	0V	0V	0V	0V
	設定目標	800H	800H	800H	000H	000H
	調整トリマ	TM1	TM1	TM1	TM2	TM2
ゲイン調整 (スケール)	基準入力	+10V	+5V	+2.5V	+5V	+10V
	設定目標	FD0H	FD0H	FD0H	FA0H	FA0H
	調整トリマ	TM3	TM3	TM3	TM3	TM3

表7-3B. 非標準Bモードの調整対象・目標【12ビット機: ADM-652AT】

設定入力範囲		$\pm 10V$	$\pm 5V$	$\pm 2.5V$	$0 \sim +5V$	$0 \sim +10V$
オフセット調整	基準入力	0V	0V	0V	0V	0V
	設定目標	800H	800H	800H	000H	000H
	調整トリマ	TM1	TM1	TM1	TM2	TM2
ゲイン調整 (スケール)	基準入力	+9.99512V	+4.99756V	+2.49878V	+4.99878V	+9.99756V
	設定目標	FFFH	FFFH	FFFH	FFFH	FFFH
	調整トリマ	TM3	TM3	TM3	TM3	TM3

ADM-656AT の再調整

調整はアナログ入力範囲の《最大値付近》と《0V》の2点間で行います。本機のアナログ回路/A/D変換器は $\pm 0.003\%FS$ ($\pm 1.5LSB$) 以内の非直線性を持っており、2点間調整だけで設定入力範囲の全域に渡って $\pm 0.007\%FS$ の精度 (= 相対正確度) を実現する能力を持っています。また高精度部品の使用により調整を実施した入力範囲以外に設定を変更してもレンジ間誤差は $\pm 10LSB$ 、すなわち相対正確度は $\pm 0.027\%FS$ 以内です。

この相対正確度 (= 校正可能限度) に校正に使用した測定器の正確度を積算した値が絶対正確度です。当社の製造・調整は $0.03\%FS$ の基準電圧発生器を使用して常温で行っています。

したがって現時点での絶対正確度は、

最終調整 $\pm 10V$ 範囲 / Aモードで $0.037\%FS$ 、
その他の入力範囲で $0.057\%FS$ です。

なお経年変化のデータ / 保証は無く、システム内部雑音・温度ドリフトにも御注意ください。

= 調整手順 =

オフセット調整 : 入力電圧が0Vのとき、A/D変換値(表示)が8000Hと
(バイポーラ入力範囲のとき) なるようTM1を調整します。

オフセット調整 : 入力電圧が0Vのとき、A/D変換値(表示)が0000Hと
(ユニポーラ入力範囲のとき) なるようTM2を調整します。

ゲイン調整 : 入力電圧が最大値付近のとき、A/D変換値(表示)が整合
した値となるようにTM3を調整します。

[オフセット調整 ゲイン調整] を2~3回繰り返して所定の精度に追い込みます。

【注】電源ONから調整実施までに10分以上のウォームアップ時間をとって下さい。

表7-3C. 標準Aモードの調整対象・目標【16ビット機: ADM-656AT】

設定入力範囲		$\pm 10V$	$\pm 5V$	$\pm 2.5V$	$0 \sim +5V$	$0 \sim +10V$
オフセット調整	基準入力	0V	0V	0V	0V	0V
	設定目標	8000H	8000H	8000H	0000H	0000H
	調整トリマ	TM1	TM1	TM1	TM2	TM2
ゲイン調整 (スケール)	基準入力	+10V	+5V	+2.5V	+5V	+10V
	設定目標	E1A8H	E1A8H	E1A8H	C350H	C350H
	調整トリマ	TM3	TM3	TM3	TM3	TM3

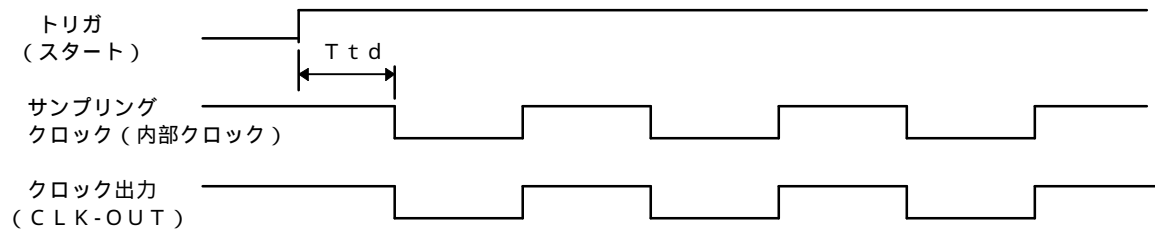
表7-3D. 非標準Bモードの調整対象・目標【16ビット機: ADM-656AT】

設定入力範囲		$\pm 10V$	$\pm 5V$	$\pm 2.5V$	$0 \sim +5V$	$0 \sim +10V$
オフセット調整	基準入力	0V	0V	0V	0V	0V
	設定目標	8000H	8000H	8000H	0000H	0000H
	調整トリマ	TM1	TM1	TM1	TM2	TM2
ゲイン調整 (スケール)	基準入力	+9.99969V	+4.99985V	+2.49992V	+4.99992V	+9.99985V
	設定目標	FFFFH	FFFFH	FFFFH	FFFFH	FFFFH
	調整トリマ	TM3	TM3	TM3	TM3	TM3

7-4. 付録 (制御信号・タイミング等)

クロック入出力

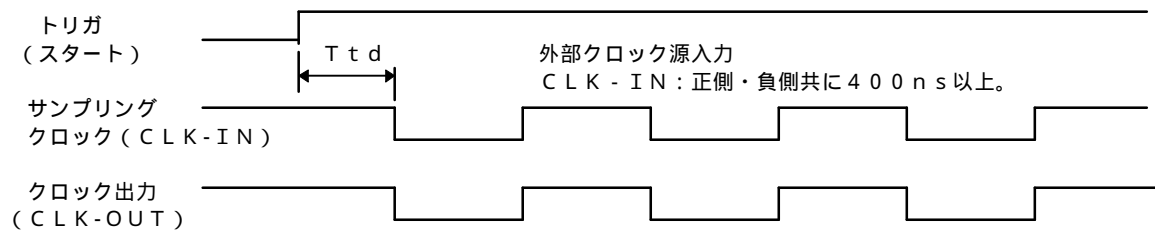
図7-4A. 内部クロック源を使用する場合



: クロック出力の有効エッジは常に立下り。

T_{td} : トリガ認識から最初のクロック有効エッジまでの最大遅れ時間 (最大 250 ns)
 実際のサンプリング実行はクロックの各有効エッジから 125 ns 以内に開始。

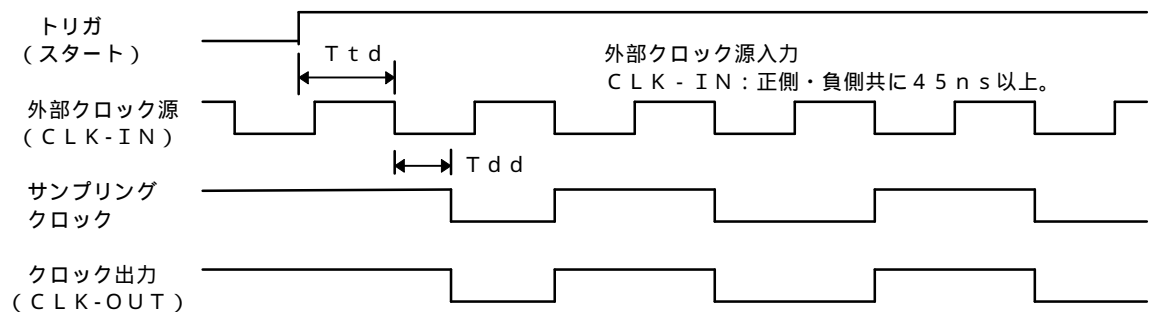
図7-4B. 外部クロック源を非分周 (1/1) で使用する場合



: クロック出力の有効エッジは常に立下り。

T_{td} : トリガ認識から最初のクロック有効エッジまでの最大遅れ時間 (外部クロック源 1 周期)
 実際のサンプリング実行はクロックの各有効エッジから 125 ns 以内に開始。

図7-4C. 外部クロック源を (任意に) 分周して使用する場合



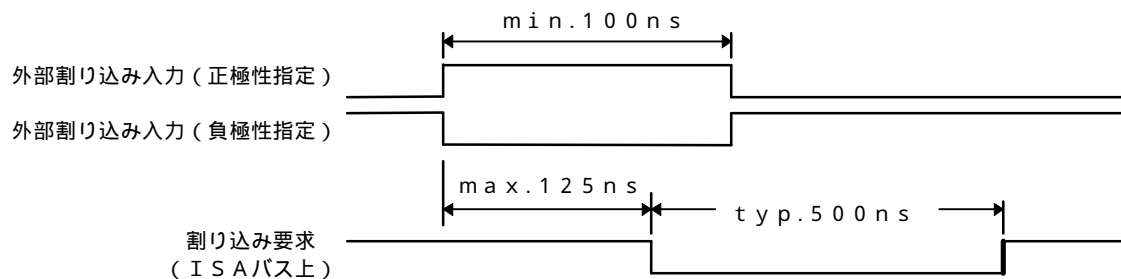
: クロック出力の有効エッジは常に立下り。

T_{td} : トリガ認識から最初のクロック有効エッジまでの最大遅れ時間 (外部クロック源 1 周期)
 実際のサンプリング実行はクロックの各有効エッジから 125 ns 以内に開始。

T_{dd} : 分周開始の遅れ時間 (最大 250 ns)

外部割り込み入力 (許可されている場合 / 3-7 項)

図 7-4D. 外部割り込み入力 ~ 割り込み受け付け

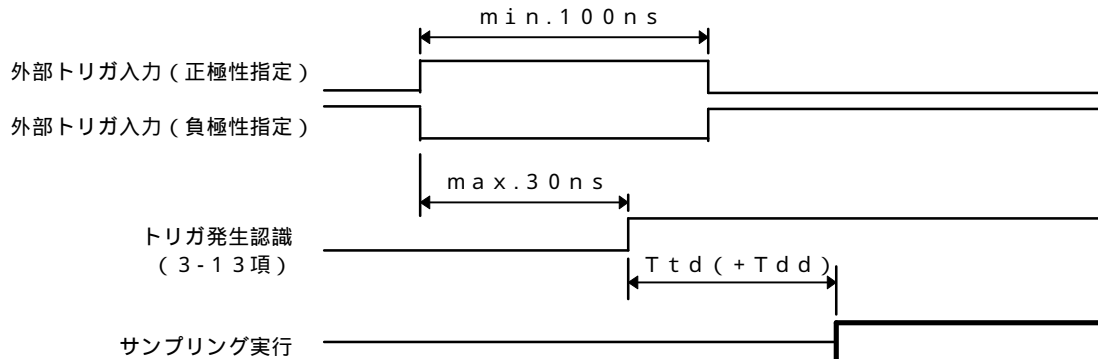


: 外部割り込み信号入力 (INT-IN) の有効エッジ。

: (パソコン = ISAバス上) 割り込みコントローラの受け付けタイミング。

外部トリガ入力 (許可されている場合 / 3-11 項)

図 7-4E. 外部トリガ ~ 連続サンプリング開始



: 外部トリガ信号入力 (TRG-IN) の有効エッジ。

: 連続サンプリングの開始タイミング。

Ttd: 図 7-4A, B, C 参照。

Tdd: 図 7-4C 参照。

マイクロサイエンス（株）行

FAX : 03 (3 2 4 7) 1 8 5 0

Q & A フォーム

発信： 年 月 日 / 時 分

製品名	ADM-652 / 656 AT		購入時期	年	月	
ボード上の 設定、 使用状況	SW1 : SW2 : SW3 :	I / O ベースアドレス設定 (出荷時 : 0 1 D)				
その他						
I / O、 周辺状況	同時使用の 他ボード				I / O アドレス 割り込み、等	
本体 システム	パソコン本体				拡張BOX	
	本体メモリ					
	OS	DOS ()	WIN ()			
ソフト	言語				コンパイラ	(v r)
	プログラム名					
(動作状況)						

《 60 分以内に回答のないときはお叱りください。 》 TEL : 03 (3 2 4 7) 1 8 4 0

御使用者		(所属部・課)
団体名		
TEL		(所在地)
FAX		

